

【氏名】 巽 由樹子

【所属大学院】（助成決定時） 東京大学大学院 人文社会系研究科

【研究題目】

19世紀後半ロシアの商業的定期刊行物と読者集団
ー近代ロシア「市民社会」の構造と価値観の考察ー

【研究の目的】

1860年代以降のロシアでは、農奴制廃止をはじめとする「大改革」が行われ、近代市民社会が生まれたとされる。だがその担い手たる中間層は、国家の強大な影響力の下で固有の階級意識を成熟させられずに革命後消滅した存在であるため、ロシア市民社会は流動性が高く、実態の分析は難しい、とされてきた。一方、この時期のロシアでは、1840年代まで官製誌と教養層向け文芸誌しかなかったところに、大衆的・娯楽的な「商業的定期刊行物」が急速に普及するというメディア革命が起きていた。この新メディアは、それまで読書習慣がなかった中間的階層に新しい読者集団を作り出した。本研究は、この商業的定期刊行物の流通機構と読者集団を分析することで、ロシア中間層の存在範囲と実態を可視化し、近代ロシア市民社会の構造と特質を具体的に描出することを目的とする。

【研究の内容・方法】

第一に、商業的定期刊行物を、どこで、誰が読んでいたかを分析することによって、ロシア市民社会に存在した情報権の地理的範囲と身分構成を明らかにする。このために必要なのは、①定期購読②店頭販売③公共図書館という三つの流通機構に関する資料の収集と分析である。

第二に、商業的定期刊行物がいかなる情報を提供し、それがどのように読まれ、受容されていたかを検討することによって、ロシア「市民社会」に流布していた価値観を論じる。このために取り組むことは、①商業的定期刊行物の記事、広告②商業的定期刊行物編集部が残した資料③読書経験に触れた「市民」自身の回想録、日記という三種の史料収集と分析である。

これらの作業にあたって、商業的定期刊行物としては、革命前ロシアで最大誌だった絵入り雑誌『ニーヴァ』を中心材料に、他の絵入り雑誌も数誌を補完的にとりあげながら、検討する。上記、第一の課題に関しては主に数量的分析の手法を、第二の課題についてはテキスト分析の手法を採ることにより、テキストの内部と外部との双方のバランスを取りつつ研究を進めるよう努める。

申請者は、モスクワにあるロシア国立人文大学に研究生として所属する形でロシアに生活の拠点を置き、モスクワ、ペテルブルクの文書館、図書館で史資料の収集にあ

たるかたわら、現地の各種研究機関の研究者から助言を受けた。帰国後の現在は、近代ロシア市民社会を考察する大きな視野を意識的に持ちつつ、収集した史料の分析に取り組んでいる。

【結論・考察】

現時点では、公共図書館に関するデータからのみの結論になる。第一に公共図書館という流通機構によって、定期刊行物を含む出版メディアの地理的、階層的範囲は次のような段階を経て変化した。すなわち、1830年代－40年代の図書館の点のような分布と教養層のみの利用から、1860－70年代にヨーロッパ・ロシア全域で、旧読者と並んで、従来の身分制における商人、町人と、専門職や企業勤務者ら新しい都市民の混合した都市生活者からなる新読者へと拡大し、90年代に地理的には都市ばかりでなく農村部へ、利用者は農民・労働者へと広がった。またこれは、限られた識字層の中、ロシア語圏内に限定される現象であった。第二に、公共図書館の情報空間において中間層に比定できるのは、四身分制内の都市民(商人・町人)と新たな都市生活者が構成する新読者層であった。今後、現地で収集した他の史料を用いて、より詳細な地理的差違、中間的読者層の自己認識について分析を深めていきたい。